

環境としてのウサギを問う

—ウサギとともに暮らす幼児の姿を通して—

鍋島恵美¹⁾・光村智香子²⁾・高野史朗²⁾・北山千嘉子²⁾

Experiencing a “Rabbit’s Story” :

A Case Study of Raising Rabbits in a Kindergarten Setting

Emi NABESHIMA ,Chikako MITSUMURA, Shiro TAKANO
and Chikako KITAYAMA

抄 録：幼稚園教育は「環境を通して行う」教育である。子どもは遊びを通して様々なことを経験していく。その中で、幼稚園における「飼育」は「遊び」であるのか、また命ある飼育動物は子どもにとって「教材」であるのか、継続するウサギの飼育の保育実践を振り返った。その中で、「飼育」は「対象からの拘束（川崎，2013）」を受けながらも子どもたちにとっては「遊び」の要素を多く含んでいること、飼育動物と触れ合う直接体験の中で起こる様々な感情体験が友だちとの間で響き合うことが「飼育」の特徴として見えてきた。また飼育動物は、体温、応答性といった特性や、生き物であるがゆえに起こる予期せぬ出来事が子どもの心を大きく揺さぶることなどが、他の遊具や玩具との大きな違いとして挙げられた。さらに、人的環境としての保育者が共に心を揺らし続ける存在となることで、飼育動物が単なる「教材」としての意味に留まらず、子どもたちにとって人的でもない物的でもない「命ある環境」として位置づけられていくことなどが明らかとなった。

キーワード：幼児、飼育と遊び、環境、教材

1. はじめに

筆者らの幼稚園では、2000 年度から途絶えていたウサギの飼育を 2007 年度より再開した。その命をつなぐ継続飼育の意味を「ウサギと共に暮らす日々のできごとから」提言してきた(鍋島他 2010,2011 光村他 2012)。さらに、2012 年度には、かつて幼児期にウサギと共に暮らしてきた 5 年生の子どもたちが、他界したウサギの“ハイ”を見送るなかで綴ったメッセージカードには、命の尊厳さとあの世の世界観が映しだされていることを明示した(鍋島他 2013)。書き言葉を習得した 5 年生の子どもたちは、幼児期を振り返り当時のことを見つめ、更には、未来につなぐ時間軸を想定し、自分の“ハイ”へ寄せる思いを素直に言葉にして綴っていた。

筆者らは、幼稚園教育要領総則第 1「環境を通して行う」ことを幼稚園教育の基本として、直接体験の重要性と、その経験の積み重ねの中で物事を分かっている過程を大事にして保育を営んできた。特に、飼育活動に関しては、領域「環境」の内容(5)「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気づき、いたわったり大切にしたりする」とあることから、本学附属幼稚園(京都教育大学附属幼稚園)で 1950 年代から飼育活動を保育の中に取り入れられてきた経緯も鑑みて、ウサギの飼育を再開した。ウサギの飼育から命をつなぐことに注目し「継続飼育(学校教育飼育動物学

1) 元京都教育大学附属幼稚園， 2) 京都教育大学附属幼稚園

会、2009)」という考えをもとに保育を計画し実践してきた。そのなかで保育者の視点としては、「飼育」ということに重点を置いてきた。しかし、5年生の子どもが幼稚園時代を振り返り綴る中には、「飼育」は「ウサギと一緒に遊ぶ」ことであり「ウサギと一緒に遊べて楽しかった」とあること、つまり、子どもには「飼育」も「遊び」であったことが分かる。

一方、2007年度より再開されたウサギの飼育を継続飼育の考えを繋いで保育計画を立てて実践を重ねる中で、2013年度に、筆者の一人である光村は、5歳児担任として、飼育しているウサギの“チカラ”と“ウメ”との子ウサギ誕生を願い保育に取り組んだ。そして、今、幼稚園で飼育するウサギは、「教材としてのウサギ」なのかとの疑問を抱き始めている。

Ⅱ. 研究目的と方法

1. 目的

本研究においては、幼児期に命との出会いと別れを体験した子どもが、小学校5年生になって『飼育していたウサギのハイとの別れ(死)』に遭遇する。筆者たちと共に別れの場に立ち会い見送るその場で「ハイへ」と呼びかけたメッセージカードを自主的に綴ったその語りから、幼児にとっては「飼育」も「遊び」であることに気づかされた。

そこで、筆者らは「飼育」すること、ここでは名づけてウサギの継続飼育をしている「飼育」が子どもにとって「遊び」だとすると、保育環境としての遊具や玩具に働きかけての遊びと一緒なのか違うのか、環境としての「ウサギ」を問い直してみたいと考えた。さらに、2013年度のウサギのウメとの飼育の保育の過程を再考し、ウサギは教材なのかという疑問点にも迫りたい。

2. 方法

以上のような問題意識から、ここでは次のような方法で実践を振り返ることを試みた。すなわち、ウサギを飼育する活動の中で記録されたエピソードから、保育者と子どもとのやり取りに注目して、①環境 ②子どものかかわり ③保育者の願い・援助と思われる個所に観点別のアンダーライン(前記のような3種)を引いて、それらの観点から「飼育」は「遊び」なのかどうか、もし「遊び」とすれば、遊具や玩具に働きかけての遊びとの相違点や特性を検討する。

ここでのエピソードは、筆者(保育者)が記録したものであり、5領域の保育内容の観点がある中に埋め込まれている。それらのエピソード記録は保育者による主観性が高いとも考えられるが、その点は、一緒に実践をしてきた筆者らでエピソードの解釈の妥当性を協議・検討した。

記録対象期間 2008年6月・9月、2009年2月

2013年4月・5月

観察場所 中学校校庭に立つプレハブ保育室(耐震工事中のため)
幼稚園の保育室・遊戯室

ると、コトミ「…(頷く)」とウメのケージの前に座って様子を見ている。しばらくすると再びコトミ「だっこしてもいい？」と尋ねるので、保育者「今はまだ我慢かなあ」と答えるとコトミ「…(顎を引く)」と少し嫌そうにウメの側に戻る。しばらくすると、コトミ「もうだっこしてもいい？」と再三尋ねにくるので、保育者「コトちゃん、赤ちゃんギョッてなったら死んでしまうしなあ、産まれるまではだっこは我慢しよなあ」と伝えるとコトミ「うう〜ん」と拗ねながらもウメの側に戻る。その様子を見ていたミキナが、ウメの座っている場所に一番近いケージの間隙から指を入れると、ミキナ「これやったら大丈夫や」と、届くか届かないかの指先を動かしてウメの背中を撫でてやる。コトミも同じようにし、ウメに指先が届くと笑顔になる。

【考察 2】

環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
保育室内のケージ	抱っこしていい →	おなかに小っちゃい赤ちゃんいるしなあ
チカラ		← 今は抱っこできひん
ウメ	抱っこしていい →	← 今はまだ我慢やな
	もう抱っこしていい ←	← 生まれるまでは・・・我慢
	これやったら大丈夫 (ケージから指をそっと入れてウメをなでる)	
	笑顔になる	

妊娠したウメの飼育についてみんなで話し合った次の日、今まで抱っこして遊んでいた子どもの抱きたい気持ちは収まらない。保育者が飼育の視点に立って我慢を伝えるが、それでも「抱っこしていい」とのやり取りが続く。やっと保育者から「生まれるまでは」との言葉で我慢の時間を感じとっていることが分かる。そのやり取りの様子をみた友達から、抱くだけでなく触れることでも遊べることを知る。直接抱っこする楽しみを味わってきた子どもが、我慢(抑制)の範囲内でウメと触れ合う遊びを子ども同士で共有し、子どもなりに欲求の実現を調整しているように考えられる。

■エピソード 3 出産に備えて「…(まだやなあ)」「…(そうかあ)」*****2013/05/13

5月10日(金)の朝、ウメが糞をくわえて頭を上下に振り始めた。いよいよ出産かと場を整え、子どもたちにも静かにしなくてははいけないことを伝え、自分たちの生活の場を保育室から遊戯室に引越し、ウメのケージも2クラスの間にある絵本室へと移した。保育室に入る時には“抜き足差し足”で歩いたり、大きな音をさせた時にはその場にいたみんながハッと顔を見合わせたり、うっかりして普段の声の大きさを話した時には「シーッ！ウメちゃん！」と声を掛け合ったりして、互いに気を配って過ごしていた。

そんな中、ウメの様子を探ろうとするハルミとソウ。二人でウメの出産部屋である絵本室のオーディオンカーテンにぴったり耳をつけて絵本室の中の様子をうかがったり、床に寝転んで隙間からじっと見つめたりしながら、二人で顔を見合わせ「…(まだやなあ)」「…(そうかあ)」と目と目で話をしている。

【考察3】

飼育環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
2F 保育室 出産部屋:絵本室		← 出産間近を感じ、飼育環境を提案
ウメ	抜き足差し足 そっと	
子どもの保育室:遊戯室 1F	しっ! ウメちゃん(いるから)	
チカラ	チカラも一緒に引っ越す 絵本部屋に耳を付けて聞いたり、隙間からのぞいたりする	

保育者からの飼育環境の提案を受け入れ、自分たちの暮らしの場をチカラとともに遊戯室へと引越ししたり絵本室をウメに提供したりと、ウメの出産に備えて保育者と子どもとが協働して準備をしている。子どもは行動の規制を余儀なくされているにもかかわらず、それを素直に受け入れている。それは、出産という命の誕生への緊迫感を感じるからであろう。

■エピソード4 まさかの結果「これ飲んだら元気になるしな…」*****2013/05/16

出産予定日を過ぎても赤ちゃんが生まれなかったウメ。保育者も気が気でない。かかりつけの動物病院もなかったため、飼育動物について指導をいただいている遠方の獣医師の先生にウメの様子を伝え相談すると、ウメの年齢を考えると妊娠の兆候ではなく病気の可能性が高いからすぐに近くの病院で診察してもらうようにとのこと。急いで病院へ連れて行った。受診の結果、細菌による子宮の炎症であることがわかり、手術も考えながら、投薬治療を続けることとなった。その結果を子どもたちに伝え、しばらくケージから出られないことや抱っこもできないことを話した。静かに話を聞いている子どもたちは、残念そうにしている。保育者は辛い気持ちでいっぱいになる。

子どもたちにも投薬の様子を見ることができるようになると、自分が病気になった時の姿と目の前のウメを重ね、薬を嫌がるウメを「これ飲んだら元気になるしな…」と励ましたり、「ウメちゃんの好きなレモンの匂いの葉っぱに薬を混ぜて食べさせてあげたらいいねん」と、自分がお母さんにしてもらったことを思い出したり、手術を思い浮かべ「痛いなあ」といたわったりしている。

【考察4】

飼育環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
保育室内のケージ	静かに話を聞く	← ケージから出せない
チカラ	残念	抱っこもできない安静が必要
ウメ	これ飲んだら元気になる	← 投薬の様子を見せる
↑		
妊娠ではなく病気が発覚	ウメちゃんの好きなレモンの葉に混ぜたらええ	

小さな命と出会う期待から、病気の看病が必要である心配に転じた感情の体験を子どもも共に味わう結果となる。これは、相反する感情体験ではあるが、ともに命を慈しむ感情である。飼育環境は、出産準備の環境から、元気になることを願っての飼育へ転換している。子どももそれを受け入れて、自分が病気の時に親からしてもらおうようにウメにしてやろうと、保育者と同じ思いで関わっていく。この行為は、子どもの遊びの「お医者さんごっこ」や「病院ごっこ」の感覚ではなさそう

である。ウメの命を守ろうとしている実際の行為である。

■エピソード5 回復したウメ「レモン(パーム)の葉っぱ、食べさせていい?」*****2013/10/28

投薬を続けることで回復にも向かい、自由に散歩できるようになったウメ。大人も子どもも共に、おなかに触らないよう、またしんどい思いをさせないよう、気を配りながら生活していた。そんな中で、ウサギの秘密基地(子どもたちがウサギと一緒に遊ぶために作ったダンボールの家やトンネル)で遊んでいるウメがダンボールを食べていることに気づいたサト「ウメちゃんがダンボールバリバリ食べたはる、食べていいの?」と保育者に尋ねる。保育者「だめよ」と聞いたサトは「レモン(パーム)の葉っぱ食べさせていい?」保育者「いいよ」サト「じゃあ 行ってきまーす!」とレモンパームの葉を摘みに行く。



【考察5】

飼育環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
保育室内のケージ	病気後気を配りながらの生活	
チカラ	ウサギの秘密基地づくり 一緒に遊ぶ	
ウメ	段ボール食べていいの →	だめよ
	レモン(パーム)の葉っぱ食べさせていい?	いいよ

看病の生活から半年が経過する中で、ウメが回復していく様子を共に暮らす中で自然に受け止めていくと同時に、回復に向かうウメもケージでじっとしているのではなく動き始める。新たに購入した大型ケージの空き箱があったことから、それを使った基地づくりの遊びが始まる。その遊びの中にウメが参入してくると、自分たちの基地からウサギの基地へと命名が変わってくる。ウサギの飼育と子どもとの遊びが融合してくる情景と考えられる。その遊びの中で、回復したウメにとっての適切な食べ物を保育者に尋ねてからやろうとする、命を慈しみ守ろうという飼育行為が立ち上がってくる。

第1部 考察

ウメに赤ちゃんが生まれるからと整えられていく環境作りに、子どもは納得し協力していく。今まで触れ合ったり抱っこしたりと遊んできたウメとのかかわりが制約を強いられることになるが、新たな命の誕生を待ち望む期待感や楽しみがあることから、我慢をしていく。しかしながら、子どもは、遊び方(関わり方)を代えることで遊びたい欲求を満たそうとしていく。ウメの妊娠が実は病気があったとわかった時、子どもの喜びや期待感は、残念な思いへと変わるが、保育者の看病する姿や安静を要しているウメの姿を目の当たりにする中で、ウメの病気が治ってほしいとの願いに変わっていく。そして、病気を治すためには薬を飲まないといけないという知識を持ち合わせている子どもは、薬を拒むしぐさを見せるウメに何とか薬を飲まそうと知恵を絞っていく。餌を与える時も、ウメのおなかの調子を排便で見定めつつ、病気になる以前は好物でよく食べていたレモンパームの葉も、食べさせてよいものかどうかを尋ねてから摘みに出かけるなど、保育者の知恵を借りつつ看病しようとする。子どもも病気になった時に親からしてもらった看病を、ウメに自分たちでしよ

うと試みている。人とは違う生き物としてウサギに関心を寄せるとともに、このような人と同じように看病を受け生の営みをしていることにも気づいていく。

第2部 ウサギの飼育を始める 2007年度の実践から

ここでは、2007年度の実践を振りかえることで、2013年度と飼育環境の違いを考えてみたい。

2007年度9月から園舎保育室棟が耐震工事にかかった。園庭は使用できるものの保育室は隣接の中学校グラウンドに建つ2階建てのプレハブ校舎を使用することになった。引っ越しは保育者で済ませたものの、子どもも保育者も初めて迎えるプレハブ生活への緊張感と楽しみとが交錯するなかで2学期が始まった。園庭は使用できたので、従来の飼育当番は園庭にある飼育小屋まで出かけて世話をした。新しく飼育を始めるウサギは、飼育小屋にはウコッケイが住んでいるので、すぐには互いの習性から無理であろうとの判断で同居させず、ひとまずプレハブ園舎の空き教室を“ウサギ部屋”として使用することにした。

1. ウサギと出会う環境

■エピソード6 「かわいい 飼いたい *****2007/09/07

2007年度第1学期を迎え動物当番（ウコッケイとカメの世話）が始まった。飼育小屋がより身近な場になったからか「昔はウサギもいたんやろ？」という子どもの声を耳にする。園としても一昨年からウサギの飼育の再開を考え始めていたことや、夏休みに入って、京都市立 K 幼稚園からウサギの赤ちゃん誕生のニュースが届いていたこともあり、子どもたちとウサギを飼うかどうかの相談をすることにした。子どもたちは、ウサギという言葉から「かわいい」「飼いたい」との声がすぐにあがった。しかし、子どもたちには、具体的な世話の仕方等も伝えそれができるかどうかとの話もした。その結果、「でも、飼いたい」「（世話は）できる」との応答から飼うことが決まった。その日から、子どもたちと共にウサギが楽しく生活できる場として空き室を整えていくことになり、その仕事をしつつ「わたしニンジン持ってきてあげる」「男の子かな？女の子かな？」「ココちゃん（名前）がいい！」とやってくるウサギを心待ちにする姿が見られた。ウサギの世話をしたり、抱いたりなでたり一緒に遊んだりしながら、自分たちと同じ命あるものに愛情をもって大切に育てていきたいと保育者も願った。動物好きの副園長からは、人になついてくれるウサギになってほしいならば、子ウサギから人の手で育てていくことや、トイレトレーニングをしていくことの大事さを伝授してもらった。保育者の私たちも子どもと同じ緊張感と期待感を持ってウサギとの出会いを心待ちにした。

【考察6】

環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
保育室と同じ並びの空き教室	かわいい 飼いたい	← ウサギを飼育する相談
	できる でもできる	→ 子どもが世話をすること
	ニンジン持ってきてあげる	← 飼育の場を作る提案
	男の子かな？女の子かな？	
	ココちゃん（名前）がいい！	↓
保育者の願い	・・・世話をしたり、抱いたりなでたり一緒に遊んだりしながら自分たちと同じ命あるものに愛情をもって大切に育てていきたい	

ウサギを飼育すること、そのための飼育環境を作ることを子どもとともに相談し決めていく。そのなかで、子どもは飼育する仕事の困難さを保育者から伝えられても「かわいい」「飼いたい」気持ちから、「できる」さらに「**でも** できる」と、世話(飼育)することが可能だと主張していく。そして、たまたま保育室の並びに空いていた教室をウサギの飼育室として使用することにして、ウサギを迎える場を整えて準備することになる。子どもの期待感を保育者も共に味わいながらの飼育環境作りとなる。その中で、保育者の願い、つまりウサギの「飼育」とウサギとの「遊び」を通して「自分たちと同じ命あるものに愛情を持ち大切に育てる」心情を子どもに経験してほしい。途絶えていたウサギの飼育を再開するにあたって、「飼育」と「遊び」とを区別してはいるものの飼育も遊びの楽しさも共に子どもに経験してほしいとの願いを持っていた。

■エピソード7 入れ物を作って子ウサギをもらいにK幼稚園へ ***** 2007/09/07

K幼稚園までは当園から電車に乗って20分、さらに、下車して歩いて20分かかる。ウサギを連れて帰ってくるためには、入れ物があるため前日に子どもと一緒に「ウサギさんはこのくらい(の大きさ)かな?」「このくらいかも(自分の肩幅くらいの大きさを両手を広げて示す)」などと話しつつ、ちょうどいい加減の大きさの段ボール箱を選んだ。その箱を持って5歳児総勢57名で出かけることにした。ナミは家からエサも持ってきている。きっと家庭にかえってその話をしたのであろう。

K幼稚園に到着して相手先の子どもたちと挨拶を交わして話を聞く間に、渡していた段ボールの箱の中に子ウサギを入れてもらうことにした。話がすんでK幼稚園の先生が子ウサギの入った箱を持ってきて下さるやいなや、子どもたちは、我先にと子ウサギを見たい一心でその箱に向かった。その慌ただしい様子は、今まで世話をしてきたK幼稚園の子どもが「これは危ない!」と感じて、子ウサギの入った箱をその子どもたちが触れないようにと私に手渡したほどだった。その後、落ち着いて一人ずつ座って子ウサギを膝にのせてもらったり、K幼稚園の子どもから抱っこさせてもらったりした。その時の子どもの表情は、さっきの騒然とした面持ちとは違い優しい笑顔になっていた。



帰り道、みんなで気を付けて連れて帰れるように、と二人ずつ交代しながらその箱を持つことを提案した。マミ・スズカはしっかり持ち、張り切って連れて帰ろうとする。ユウタ・ナミは持ちにくそうに手を上下させながら「ななめにしたらあかん」と子ウサギを気にかけて歩く。次の人に「お願いします」と申し送りながら、みんなで園まで連れて帰った。

【考察7】

環境	子どものかかわり	保育者の意図性
段ボール箱でキャリアバックを作る		← 連れて帰る方法を提案
	ウサギを我先にみようとする勢い われ先に子ウサギを見たい 騒然	見守る
	K幼稚園児から膝に乗せてもらう	抱かせてもらう

↓

穏やかな笑顔
ななめにしたらあかん ← 気を付けて連れて帰ろう

キャリアーバックを作りウサギとの出会いを楽しみに出かけた子どもの意欲は、ウサギと出会った瞬間、われ先にウサギを見たい・触りたい欲求となり騒然となる。しかし、育ててきたK幼稚園の子どもから抱かせてもらったり、膝に乗せてもらったりするうちに、その子どものウサギを扱う身のこなしに触れたり、実際にウサギを体で感じることから落ち着きはじめていった。

2. 飼育する環境を作る

■エピソード8 ウサギ部屋をつくりつつウサギに触れる *** 2007/09/10**

園内で相談してプレハブ園舎の一部屋をもらい、大きなシートを敷いて子ウサギが自由に生活できるウサギ部屋を作ることにした。初日なので興味を持っている子どもが多く、たくさんの子どものその部屋に来た。そのため立って抱いたり、抱きたい一心でウサギを取り合ったり、抱っこしたいができない!といういざこざがあったりしたが、1時間くらいすると落ち着いてきた。ユリカ・ヒカヨ・マミ・ナミ・カコがゆっくり抱っこしたり様子を見たりしている。ユリカは自分では抱っこできずに「抱っこさせて!」と保育者に言い、友だちが抱いているのを代わってほしいと急がせた。ウサギを引っ張って抱こうとしたり、抱いて歩きまわったり、ウサギのおなかをギュッと締め付けたり…と自分の抱きたい気持ちが先行し、力加減までは気がまわらない様子を、思わず「そんなしたらおなかゲッてなるしあかん!」と保育者は止めてしまった。その様子を見ていたマミはその言葉を覚えていて、降園時にクラスのみんなに「ウサギのお腹をぎゅっとしたらおなかゲッてなるしあかん!」と知らせていた。

ユリカ「あれ?ここ硬いよ」ヒカヨ「ドキドキしてる」と気づいたことを保育者に伝える。タオルに顔をつっこむ姿を見てマミ「見てー!」と可愛いという表情で喜んだり、友だちが耳を触るのを見てカコ「耳触ったら動くはずやのに動かないよ?」と不思議に思ったり、コウスケは「パン食べるで」と、それぞれに思ったこと感じたことを保育者に報告しにくる。

私たちは、子ウサギのトイレトレーニングをしていた。トイレではない場所でおしっこをしたら、すぐに拭いてにおいが付かないようにしようと試みていた。そのことを子どもにも伝えていたので、子どももすぐに気づいて拭こうとするので、その部屋の隅におしっこ拭き用に古タオルを切って布を用意して置いた。

【考察8】

環境	子どものかかわり	保育者の、願い・援助
空き教室をウサギ部屋に	抱く 触る 食べさせる 追う	お腹がゲッてなるし
ビニールシートを敷く 古タオル	取り合う 力加減が分からず締め付ける 硬いなあ ドキドキしてる 食べた	← あかん
おしっこする 動く 逃げる		
食べたり食べなかつたり		トイレトレーニングに励む
	排尿したところを拭き取る	古タオルの準備

ウサギ部屋として準備された飼育環境の中に、子どもも保育者も一緒に入ってウサギが暮らす場所を作っていく。ウサギの扱いは触りたい、抱きたい一心でその力加減が分からず、乱暴な扱い方になる。しかし、ウサギも逃げ出したり、与えられる餌を食べなかったりと、子どもの意のままではない。あまりの扱い方に、保育者が「お腹がゲッてなる」とウサギの代弁をして子どもの力加減を調整しようとする。その一方で、ウサギがあちこちにおしっこをするので、子どもは保育者と共にトイレトレーニングをしようとおしっこした後をふき取るなど懸命に世話もしていく。このように飼育環境を作っていくときは、飼育と遊びの活動が融合しているように思う。

■エピソード 9-① トンネルづくり ***** 2007/09/10

ウサギ部屋に置いてあった段ボールと部屋の壁の隙間を子ウサギがくぐっていく様子を一緒に見ていたマミに「そういえば段ボールの隙間からも出てくるよ、私も通れるくらいのトンネル作って一緒に遊ぼうかな?」と保育者から声をかけてみた。そこから、マミ「私も作る!」と段ボールを使ってトンネル作りが始まった。作ることがより楽しめるようにスズランテープ・リボン・ビニールテープ・綿テープ等も用意した。

マミは途中で人間も通れることを確かめながらリボンやスズランテープで飾って作っている。モトヤが「戸をつける!」と家を作り始めたので、段ボールカッターも用意する。それを見て、抱っこしにきていたノゾミも作り始める。ノゾミには作りたいイメージがあり、「ここは切らんとこ」と言葉に出しながら手を止めたり、切りすぎたところはテープを貼ったりして自分の思ったように作っていく。タツオ「何やってるの?僕もやる」ととんがり屋根の家を作ったり、ユリが壁に絵を描いたり、といくつかのトンネルと家が建ち並んだ。ナナコは保育室で描いた絵をウサギ部屋の壁に貼って戻って行った。いつも一緒に遊ぶ仲間とは違う顔ぶれがここに来ていた。

■エピソード 9-② 水飲み場や段ボールの壁ができる! ***** 2007/09/11

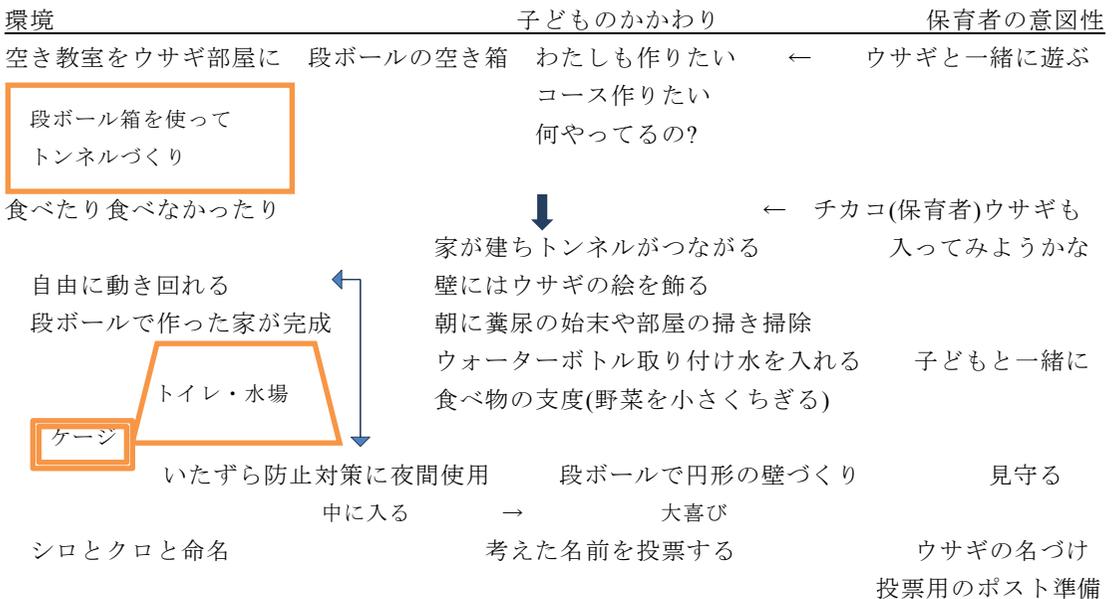
ウサギの家ができつつある頃、朝登園してくると、ココとマミがウサギがどうしているのか心配でT先生と一緒にウサギ部屋に入り糞尿の始末や部屋の掃き掃除をしてくれた。段ボール箱の家もでき、トイレトレーニングの便所をその隅に置き自由にその部屋の中で放しておいた。が、いたずらもし始めたので帰りは、ケージに入れておくことになった。この日の朝、ケージの中の掃除をまわりにいたショウタ・マミ・ヒカヨを誘ってやってみる。A市から転居してきたショウタは「Aにもいたよ。ふたつ、茶色と白 ヒマワリ(の種)が好きなんやで」と知っていることを教えてくれる。水飲み場がなかったので、新しく買ってあったウォーターボトルの取り付けに挑戦する。ショウタが張り切ってボトルに水を汲みに行き、保育者が頼んだ 200ml びつたり汲んできたので「ちゃんとやったとこまで汲んできてくれたね、ありがとう!」と感謝する。ショウタ自身もびつたり汲めたことに自信をもち、まわりの友だちに何度もそのことを口にして自慢げである。続けてユリカと一緒にもう一つの水入れにも水を汲みに行ってくれる。ココは家で飼っている犬も同じボトルで飲んでいることで興味をもち、ネジまわし役になって取り付けしてくれる。保育者と一緒に説明書を見ながら、ココ「あ〜あ(ネジが反対!)」「え〜!反対やった?」と奮闘する。ボトルの取り付け位置もわからず、マミ「(上から)四つ目は?」わたし「あれ?高すぎた?」ショウタ「三つ目がいいんちゃう?」など何度も付けたり外したりして奮闘する。その間もショウタは水持ち役でボトルを持ち続け、マミは「食べやすいように」とニンジン・キャベツを細かく手でちぎっている。ユリカは傍で子ウサギの様子を見ている。ああだこうだと迷いながらもいぶん時間がかか

ったがようやく付くと、みんなで「付いた〜!!」と大満足だった。一方、コヨリ・ユウカ・ココが段ボールで壁を作り、それを周囲に円く囲って家を作る。そこに思いがけずウサギが入ってくる。子どもも保育者も驚き、大喜びだった。

■エピソード9-③ ウサギの名前 募集ポストの設置 ***** 2007/09/10-11

子ウサギの名前を書いて投票するためのポストが桜組の保育室にできる。ミカ・ナミが朝から考えて投票している。モモ・ヨウコは画用紙を切って投票用紙を作る。子ウサギへの手紙も入っている！梅組の子どもたちの目にも見えるように、と桜組・梅組（いずれも年長）の間の廊下にポストを移動した。桜組のアタカが自分の保育室からなくなっていることに気づき、「今日書きたいんやけど、どこ？」と尋ねにくる。同じくアクも「お手紙書いた」と保育者のところへ持ってくるので「お部屋出たところに引っ越したから入れておいで」と促す。思い思いの名前が、ポストに入れられた。その日に集まった名前は、みんなに分かるように、ポストが置いてある後ろの壁に貼っていった。誰一人として同じ名前がなく、どの名前に決めるのかが難しかった。名前を一つ選ぶことより、名前をを考えてくれたことの喜びを、「先生もうれしいし、ウサギもきっと喜んでいと思う」と伝えることにした。そして、単純に今までウサギの毛の色で呼んでいたことから《シロ》と《クロ》を正式な名前にすることを提案した。子どもたちもすんなり受け入れてくれた。

【考察9】



飼育環境を整えていくにあたり、その部屋に飼育用にと準備した段ボール箱や藁などを隅にたてて置いておいた。すると、偶然にその隙間にウサギが入りくぐり抜けるという所を見た子どもの気づきから、段ボール箱を連結させトンネルづくりが始まる。ウサギの動きが子どもの遊びを誘発させる。始まりは、ウサギが通るトンネル作りだったのが、保育者の「チカコウサギも入ってみようかな」と言う言葉かけから、そのトンネルがウサギも子どもも通って遊ぶトンネルや道のようなも

の変化していく。ウサギが暮らすその空間の中で子どもが入って遊んでいる内に、トンネルの先に家ができ、扉や壁の飾り付けができ家作りへと発展していく。子どものトンネルの中に、ウサギが偶然入ると歓声がわく。ウサギと共にいる環境作りは、子どもの驚き、歓喜、興味などとともに、工夫して作るなどの意欲や態度を助長している。

一方で、遊びと共に飼育環境も整っていく。糞尿の始末をしたり、水飲み用の容器を取り付けたり、正しく飼う(命を守る)ために子どもも保育者と一緒になって工夫していく姿が見て取れる。ウサギにも、トイレトレーニングが始められるとともに、いたずら防止対策の為に、帰りはケージに入るなどのウサギの生活作りが始まっていく。子どもとウサギがともに暮らしていくためのルールができ始めていく。

空き教室一室をウサギの飼育部屋にできたこと、広いスペースという環境が初めての生き物と共生していく関係づくりに重要だったことを振り返って感じる。

3. ウサギ部屋で作ったコースでウサギを遊ばせよう

トンネル作りがウサギを遊ばせるための階段づくりやアスレチック作りへと子どもの想像が広がっていく。ウサギと出会って三週間ほどたつと、騒然とした環境ではなく落ち着き始めてくる。

■エピソード10 階段できる ***** 2007/09/20-21

ウサギ部屋にできている長いトンネルに階段をつなげてウサギを上らせたいと考えたトシオ、保育者もウサギになって遊んでいる子どももいろんなコースがあった方がおもしろいかも、と考え牛乳パックを準備した。トシオが作っている様子をいろいろな子どもがおもしろそうだとのぞいていく。トシオ「あー、テープ！」という声を聞いていたヒカオが「あー、ピンクでもいいの？」と応え、手伝うようになる。なんとなくできてくるとシロを連れてくる。牛乳パック2コを合体させて1段にして、ウサギをのぼらせようとしていた。が、階段の前で止まって引き返してしまう。マミが小さく切ったニンジン^①を一段毎に置いていくが上らない。トンネルから階段へと追い込むようにしても細い隙間から逃げていく。トシオ「なんで上らへんのかなあ？」タカヒコ「怖いとちゃう？」と話す。最後はおしりを押して上らせていた。すると、上りだけの階段だったことに気づいたココやモエコなど部屋にいる女の子たちに「それじゃあ落ちちゃう」と言われ、トシオも「ウサギの骨が折れちゃう」と気づき、ミユコが手伝って上がって下りる階段ができた。トンネルから階段へウサギを追い込んで横穴をふさいでいくが、ウサギは上ってくれない。そこで、モエコが1段ずつニンジンを置くと、上まで上ってそのまま一気に下りていった。無理やり押し上げたような感じだったが、「クロちゃんおめでとう！」とみんな喜んで「シロちゃんも頑張れ！」と次には隅っこに隠れているシロを上らせよう狙っていた。帰るときに、トシオに「階段どう？」と聞くと、「すべり台も作ったら少しすべったんやけど高い階段は上ってくれへん」と言っていたので見に行くと段ボールの長い道の中に階段やすべり台ができていて、アスレチックのようなものができていておもしろそうだった。また、シロとクロがスズランテープを口で引っ張る様子をマミ「おもちゃで遊んでる」、家の奥の壁から出ていくとココ「あ、裏口から出て行ったよ」など、自分たちの生活と重ねて見ている子どもたち。段ボールでトンネルや階段・滑り台を作ってはウサギを楽しませてやろうと張り切っており、自分たちは「迷路や！」と喜んで通っている。ところが、ウサギはなかなか階段を上らないと、トシオ「そうや、ドリームランドみたいにこうしたらいい」と階段の横をスキで飾ってみるが、ウサギは上らない。今は上ってほしい、滑ってほしい一心でおしりを押し上

げたり抱いてのせたりしていると、それを「そんなことしたらかわいそうや」と止める子どももいる。子ども同士で相談しながら遊ぶ様子をしばらく見守りたい。

【考察 10】

環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
空き教室をウサギ部屋に	階段作り ←	ウサギと一緒に遊ぶ
アスレチック へ 階段・滑り台 完成		
階段上らず引き返す	← 上らせようとニンジンをおく	見守る
隙間から逃げる	→ 何で上がらへんのかな? 怖いんと違う	
逃げる	← お尻を押して登らせる 上り階段だけに気づく 落ちちゃう 骨が折れちゃう 下りの階段づくり	
上らない	← 横穴をふさぎ追い込んで登らせる	
上り一気に下りる	← 一段ずつニンジンをおく クロちゃんおめでとう! シロちゃんもがんばれ!	

トンネル作りからウサギが遊ぶアスレチックづくりへと一人の子どもの考えから展開する。階段や滑り台を作るとすぐに遊ばせようと試みるが、ウサギのクロも応じずに逃げ出す。逃げると追い込み作戦を立てるが、また逃げられる。遊ばせたい一心でその場に居合わせた子どもが知恵をだし協力する。強引さに追い立てられて、子どもの思い通りにクロが応じた時、アスレチックなるがゆえに「クロちゃんおめでとう!」と称賛する。クロがスズランテープをかじる様子を「遊んだはる」と、自分たちと同じように遊んでいると捉えたり、「裏口から出て行った」と、一緒に生活している感覚を子どもが味わっていることが分かる。

4. 環境が変わる その1 シロとクロの成長 おとなになる

耐震工事も終了して12月に入って元の園舎に引っ越すことになる。今回は子どもと共にその準備にとりかかった。ウサギ部屋を大掃除し、引っ越し準備がウサギ好きの子どもたちで完了した。ウサギとの生活も6か月を経過している。

■エピソード11 おとなになったクロとシロを考える ***** 2008/01 中旬

プレハブ園舎の広いウサギ部屋とは変わり、なかなか自由に走り回ることのできないテラスのウサギの家。この頃子どもたちの遊びの中でウサギとのかかわり方が少し人間本位になってきているように思える。しかし、クロが雌でシロが雄と分かり、シロとクロと一緒に遊ばせるには去勢手術が必要(誕生後の飼育が困難なこと)かもしれないと、近郊の獣医に電話相談したが、去勢手術はしていないとの返事だった。そこで絵本『ウサギ(しぜん キンダーブック4月号)』をみんなで見ながらシロやクロの様子を振り返ったり、これからのことを考えたりする機会をもった。子どもたちは本のお話を聞きながら「クロと一緒にや!こんなんするもん」と顔を洗う仕草を体で真似てみせたり、布をひっかくのは「土を掘りたかったんとちゃう?」とウサギの気持ちに寄り添ったりしている。保育者「仲良しやから一緒に遊ばせてあげたいのやけど、赤ちゃんがいっぱい生まれたらお

「家もないし困るでしょう？」と手術の相談をすると、「痛いしかわいそうや!」「(様子を)見せてひっついたらサッと離したらいい」「赤ちゃん60匹生まれたりみんな1匹ずつもらって帰ったらいい」とシロを気遣う子どもが多かった。

【考察 11】

環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
空き教室をウサギ部屋に	引っ越しの片づけ	← 引っ越し準備
元の空き教室に整える	飼育環境の変化と子どものかかわりの変化 絵本を提示	
保育室前のテラス ケージ使用	クロと一緒にや こんなんするし 土 掘りたかったん違う	← ウサギのことを知ろう
保育室	痛いしかわいそうや	← 去勢手術の提案
テラス <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ケージ 見てて引っ付いたらさっと離す	一緒に遊ばせたいけど
シロとクロ	60匹生まれたり1匹ずつもらって帰ったらいい	生まれたり困る
自ら自由に動けなくなる	↓	
	去勢手術の提案は却下	見守ることになる 子どもの意見に学ぶ

ウサギとの出会いから6か月がたち、幼稚園の保育室に引っ越しする。飼育環境ががらりと変わる。子どもの保育室前のテラスにケージをおいてウサギは暮らすことになる(2013年度の飼育環境と同じ)。ウサギにとっては、自由に動き回るには、人の手を借りてケージから出してもらう必要がある。子どもは、餌を与え糞尿の始末をした後は、ウサギをケージに戻し始めた。そのかかわりの違いと、一方で、シロとクロも成長しオスとメスであることが分かる。保育者は、「(シロとクロは)仲良しやから一緒に遊ばせてあげたいのやけど、赤ちゃんがいっぱい生まれたりお家もないし困るでしょう？」と去勢手術の提案をするが、子どもは手術という言葉から「痛いしかわいそう」と応え、手術をせず、交尾行動のみまもり「さっと離す」や赤ちゃん誕生後の手だてを「60匹生まれたり、1匹ずつもらって帰る」と提案している。子どもは、シロが手術を受けることに「手術は痛い、かわいそう」と自分の身におきかえて考えている。そして、次の手立てとして生まれた命は自分たちで育てたいと願いを語る。その考えに触れ、保育者も子どもと共にウサギの成長と習性を見守ることになる。ここにも、命あるウサギの環境としての特性を見ることが出来る。

5. 環境が変わる その2 飼育環境が狭くなる

このころから、協同的な活動が保育計画の中で組み込まれ、5歳児みんなで一つの目標に向かっての劇づくりに取り組み始めた。子どもたちは、協同での遊びとともに、自分がしたい遊びをじっくりと取り組みたいという要求ももった。その遊びのひとつに砂場での遊びがある。

(1) 子どもの遊びの場所に一緒に連れて行く 砂場で遊ぶ

■エピソード 12 砂場へ! ***** 2008/01/25



自分たちが穴を掘って遊ぶ砂場へ、シロとクロを連れていく。ウサギの力を借りようとしたらしい。そのころ砂場にはタクヤ・コウ・タイキ・ハヤオが作った水路（水は入っていない）ができていた。その水路にシロとクロを放し、トシオは飛び越えないようにとともっと深い穴を掘り始める。自分の掘った穴にシロが入ってくると嬉しそうに中を覗いている。シロが入りやすいようにシロと穴との大きさのバランスを考えながらトシオ「こんくらいでいいねん」と自分で納得している。モモ・ココ・ヨウコ・ズカはシロとクロが遊べるようにと道や山を作り、その横でユウオも山を作り始める。クロが自分たちの道に沿って歩いてくれるのが嬉しく、自分たちでも歩いてみせる。時々道の続きをウサギが前足や口先で掘るのを見てズカ「今ここ掘ってたで！」と喜んで友だちに報告、その瞬間を見ようと集まってくる子どもたち。けれど、途中でウサギが道から出ようとすると大急ぎで出られないように体でガードしたり、逃げていったときには「あかんやん！」とみんな追いかけて捕まえてはまた道に戻したりもしている。

【考察 12】

環境	子どものかかわり	保育者の意図性
保育室前のテラス ケージ使用	砂場で穴を掘って遊ぶ	遊び場に連れ出してほしい
<div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; display: inline-block;">保育室</div>	シロとクロを連れ出す	一緒に遊んでほしい 見守る
テラス ケージ シロとクロ	ウサギが飛び越えない深い穴を掘る こんくらいでいい	
砂場で動く 穴に入ったり出たり 砂を掘る	作った道をウサギが歩くとうれしい ウサギの通った道を自分も歩く 今 掘ってたで! 喜び	
追われる 逃げる	途中で道から外れると出られないようにガードしたり追いかけて	

子どもは自分のしたい遊びに取り組み砂場で開放感を味わうとともに、ウサギにとっても狭いケージから砂場へと連れ出してもらえ、自由に動ける時を得ている。子どもの遊びからはウサギの習性を考えて「土を掘らせること」や、その習性を活用し一緒に穴を掘ろうとの思いが見て取れる。自分の掘った道をウサギが歩くと喜び、そのうれしさを自分もその道を同じように歩くことから体を通して感じていることが分かる。砂場での遊びは、ウサギと子どもが動きを通したコミュニケーションをしているように感じる。

ウサギと出会った当初は、ウサギを遊ばせるための階段作りだったのが、砂場での道作りの遊びは、一緒に遊ぶ自分たちの“仲間”という感覚を子どもはウサギに抱き始めているように思う。

6. ウサギの出産と死のなかで

■エピソード13 子どもの手の中で誕生***** 2008/02/14

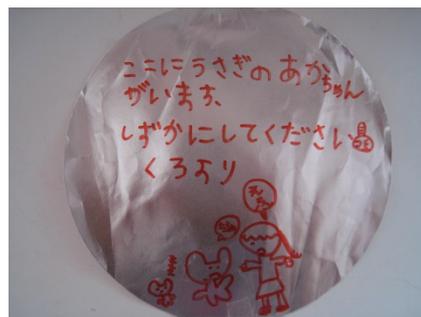
いつものように朝の世話を終え、ヨウコ・ココがシロとクロを遊戯室のウサギの家へ連れて下りる。トイレや餌も下ろして家を整えながら、クロが近づいてくるシロに「ぶうっ！」と声を出し、怒ったように引かく様子が目に入る。普段と違う姿に保育者「なんか怒ってるね」と不思議に思い、保育者「そんな怒らんでもいいの」とクロをなだめるように声をかけ、ヨウコ・ココと顔を見合わせる。

ヨウコ「抱っこしていい?」保育者「いいよ」とクロを抱っこし、ココも隣でその様子を見ている。クロがヨウコの腕の中で動き、おなかを上にしてひっくり返るとヨウコが大きな声で「先生!クロにおちんちんがある!」と叫ぶ。ココも驚いた顔。保育者も「え〜っ!?(クロってほんまは男の子やったん!?まさかそんなはず…)」と驚いてクロのお



なかを見ると、たしかに臍から棒のようなものがちらっと出ている。保育者「え〜〜っ!?」とよく見ようとすると、突然ニョキーッ!と勢いよくその棒が伸び、棒の先に指らしきものが付いている。保育者「赤ちゃんやっ!!」。ヨウコも目をまるまるさせている。保育者「ヨウコちゃん、そ〜っと下ろそか…」と驚いてクロを下におろす。保育者「エミ先生呼んできてー!!わらも持ってきてー!」と周りの子どもたちを伝令に出す。

その間に1羽生まれる。ヨウコ・ココの顔が興奮(きつと私もそうだったろう…)している。エミ先生「まだおなかにいるはずだから!」と段ボールで小さな母屋を作り、屋根を付け、暗くてそっとできる環境を整える。たくさん子どもたちが周りを囲み「ちっちゃいなあ!」、タケオ「ねずみかと思っただけ…」「耳はまだ短いやなあ」「(心配そうに)目が開いてないで」保育者「人間の赤ちゃんも生まれた時、目は見えないやで」「ふ〜ん」、モモ「あ、ちんちんあるし男の子や!」保育者「それ、たぶんへその緒違うかなあ?」「(残念そうに)一緒に遊べるのは僕らが小学校行ってからやなあ、だって大人になるまで3か月かかるんやろ?」など初めて見る(私も!)生まれたての赤ちゃんに興味津々で口々に話す。保育者「声を小さくするように促す。一方、自分の毛をむしるクロをじっと見つめヒカヨ「痛いなあ…」と気持ちを代弁したりと赤ちゃんを産み、守るためのクロの姿に心を寄せる子どももいた。出産準備を整え遊戯室を出る。先に生まれた1羽は触らずそのままにしておくことにし、クロに任せるが心配。



ひと段落してほっとするとヨウコ・ココと顔を見合わせ3人で「びっくりしたなあ、びっくりしたなあ」「うん、うん」と興奮を分かち合った。『うさぎのあかちゃんがいまいます。しずかにしてください』と紙に文字と絵を描き、遊戯室のドアに貼っておこうとする。一緒に見ていたココが「くろより」って書いた方がいいんちゃう?」と提案、モモ「あ、そうやな!“くろより”」と書き加える。

保育室ではマミたちがたくさんキャベツをハサミで細かく切り、丸い台にのせたおいしそうな「おめでとう」のケーキができあがり、母屋の傍にそっと置かれた。シロも自分の赤ちゃんが見たんだろうと、ケージごとクロのいる遊戯室に引っ越した。



集まる子ども



ケーキを作る子ども



そっと置かれたケーキ



ケーキを食べるクロ

【考察 13】

環境	子どものかかわり	保育者の願い・援助
保育室前のテラス	劇遊びの場所(遊戯室)に連れて行く	一緒にかかわる
ケージ使用	クロの様子がおかしい クロにおちんちんがある!	(クロに)そんな怒らんでえええっ!
保育室		
テラス	目を真ん丸 驚く	赤ちゃんや!
ケージ	目を真ん丸 驚く	赤ちゃんや!
シロとクロ	そっとおろす	そっとおろそうか
クロの出産	そっとおろす	母屋づくり提案し作る
遊戯室	小っちゃいなあ ネズミかと思った →	
母	ミミまだ短いなあ 目空いてない ←	声を小さくしようか
ケーキ	一緒に遊ぶのは小学校行ってからやなあ	
シロのケージ引越し	クロが毛をむしる 痛いなあ	
誕生した1羽は母屋の中に	一番目に誕生した子はそのままだ	
	バースディケーキ作り	シロのケージをクロの傍に
	静かにしてください」の張り紙作り	

飼育環境が変わったことで、子どもは、自分の遊びの場所へウサギを連れて出かけるようになる。このころには、劇遊びの取り組みも進んでおり、子どもの遊びの場も遊戯室に集ってくることが多くなる。ウサギも共に遊戯室で過ごすことが多くなり、そこにウサギ部屋が作られる。子どもと一緒に時間はそこがウサギの居場所であり、子どもが帰るときには、保育室前のケージが住処となる。その生活の中で、子どもと保育者が共にクロの出産のときに立ち会う偶然のとてつもない感動を味わう。興奮している情景が子どもたちの言葉のやり取りから察することができる。あわてて出産の場所(環境)づくりをしていくなかで、出産中のクロのこと、生まれる赤ん坊のことで、心配と不安と期待と楽しみとが混在する複雑な感情を子どもも保育者も共に味わって作業をしていることがわかる。

最初の赤ん坊が無事に誕生し、その緊迫感が安堵感へと変わった瞬間、生まれた赤ん坊を見て、「小さいなあ」「耳は、まだ短いやなあ」「目があいてない」とよく観て気付きを言葉にしている。一方、出産後のクロは母屋に入り、自分の毛をむしり子どもに掛けようとする。その仕草を観ていた子どもが「痛いなあ」と、ウサギが種の保存の習性でしている行動ではあるものの自分に置き換えて共感している。このうれしいニュースはすぐに他の場所で遊んでいた子どもにも伝わり、魔女ごっこをしていた子どもたちはバースディケーキを作り始める。ケーキのトッピングには、ウサ

ギが好きな野菜を使用する。ごっこの遊びと現実とを行き来している子どもの世界が見て取れる。

雄のシロを自分の子ウサギの傍においてやろうと、そのケージを遊戯室に運び、ウサギの親子が共にその場で暮らす環境作りに展開していく。子どもはそっと母屋をのぞいては様子をうかがいつつ見守っていく。

7. 見守る子育て・子育て

■エピソード14-① お見舞いに…***** 2008/02/15

翌朝、登園するとその足で遊戯室へ向かうココ。ココ「お見舞いの花束、作ってきた」と折り紙で作った花束を渡してくれる。クロに見えるよう、柵の入口付近に飾る。ヨウコも朝出会ったときから「抱っこしてたら生まれたなあ!」としっかりした口調で、思い出しては嬉しそうに話す。

ミカ「あの子、どうなった?」と最初に生まれた赤ちゃんの話が出てくると保育者「うん、やっぱり寒くてあかんかったみたい…」と亡骸を見せる。子どもたちと一緒に動物たちの慰霊碑の元に埋めに行く。途中、さみしくないようにきれいな花と一緒に埋めてやりたいことを伝えるとナツコ「探してくる!」と2階へ走っていき、ピンクのサクラソウを少し切って持ってくる。何種類かの草花と固形のえさを箱に入れてやる。「天国に僕のおばあちゃんいてるし大丈夫やで」と安心させてやる姿もある。

■エピソード14-② トシオの布団 ユリカのマフラー ***** 2008/02/18

登園後、母と共にトシオが遊戯室へやってきて、赤ちゃんのための手編みの布団を見せてくれる。トシオ「土曜日と日曜日とずっとしてん、しんどかったわ!」と疲れたような、照れくさいような顔。本当は母屋に敷いてやりたいと思っていたようだが、生まれたばかりの赤ちゃんに人間の匂いがつくとクロが赤ちゃんを育てなくなってしまうかもしれないことを伝えると、クロが持っていくことを期待しながら、ぼんっと柵の端っこに入れる。



届いた布団とマフラー

トシオの布団を見て何か思ったことがあったのか、翌日はユリカが母と共に遊戯室へやってきて手編みのマフラーを赤ちゃんに、と持ってくる。言葉はあまり出てこないが、自分ができることで何かしてあげたいと思ったのだろうか?

■エピソード14-③ 見守る心-自制心- ***** 2008/02 下旬~03 上旬

登園後、ヨウコ・ココ・ミカ・モモ・ユリカ・トシオたちは赤ちゃんが大丈夫かどうか心配、遊戯室へやってくる。みんなで重なって母屋に隠れたり、クロの下にもぐっておっぱいを探したり、間違えてシロのおっぱいをもらいにいったりする姿を柵の上から「かわいい~」とうっとり頭を並べて見ている。その姿もまたかわいい。まだ赤ちゃんだから、と早く抱っこしたかったり一緒に遊びたかったりする自分たちの気持ちをおさえ、元気に大きくなるのを願うとともに楽しみにしている。



【考察 14】

環境	子どものかかわり	保育者の、願い・援助
育児中のシロとクロの部屋	抱っこしてたら 生まれたなあ	感動を受容
	飾る 花束を作ってお見舞いに	
	あの子(第一子)どうなった 亡骸を寂しくないように花で飾る 天国に僕のおばあちゃんいるし大丈夫	寒かったのか駄目だった 亡骸を子どもと共に葬る
お見舞い おっぱいを探し飲む赤ちゃん	布団を休日に編んでくる 見る かわいい 早く一緒に遊びたい	マフラーを編んでくる 受容 うれしい 一緒に待つ

新たな命と出会い、家族が増えたウサギの飼育環境は一変する。父親のシロも傍に引越し、家族一緒の環境を整え、育児するクロの様子を子どもと保育者が共に見守る環境になる。お見舞いや寒いからと心配をしてウサギの親子に贈り物が届けられる。子どもは喜びと心配を形にして届けようとする。受け取るウサギに言葉がないのを保育者が代わって「よく見えるように」「クロが持つて行ってくれることを期待して」と、子どもの思いの通訳をしてかかっている。おっぱいをやる親ウサギとおっぱいを探して飲む子ウサギの姿を見る。一方、生の喜びの裏にある死の悲しみも子どもに亡骸をみせてかかわることも重要な意味がある。亡くなった子ウサギが「寂しくないように」と花を手向きたい保育者の願いを子どもは素直に受け入れて探しに行く。保育者の願いに添うことで命を慈しむことを理解していくのであろう。

8. 元の保育室の暮らしに戻って

■エピソード 15 ウサギの親子を保育室に *****おたより (2008/03/14 付)より
先週末から乳離れし始めた子ウサギが、体を寄せ合い餌を食べる仕草は見ていただけでほのぼのとします。今週からだっこすることもできるようになり、好きな子どもたちが輪になって膝に乗せています。「かわいいなあ…」と子どもながらに目を細めています。あやすような子どもの声も聞こえてきますよ。それよりも、トイレのシート換えを上手にする子どもがいるのに感心します。チカコ先生がしてきたことをそばでずっと見てきている子どもたちです。頭が下がります。暖かな日差しの中、久しぶりに外にシロを連れ出していった子どもが「砂場でウンコしそうや」と、ウサギのお尻を上向きに抱いて慌てて保育室に連れて帰っていきました。「間に合ったわ」と、ウサギのケージの中にあるトイレでウンチが出たことをこんな風に表現していました。我が子を世話しているかのような言葉です。

【考察 15】

環境	子どものかかわり	保育者の意図性
保育室内 ケージも使用		
	朝にトイレのシート代え 手際よい	任せ 見守る
	子ウサギの餌食べを見入る	子どもの表情にみとれる
テラス	輪になって座り膝に乗せて抱く	

寒さが厳しくなり保育室内にケージも移動 かわいい

子ウサギ乳離れ 餌を食べる

抱かれる

シロを連れ出す

シロ トイレまで我慢 うんちする うんちを察して保育室トイレまで走る 感心する

間に合ったわ

子ウサギの乳離れの時期を迎え、飼育環境を遊戯室から保育室へと戻す。寒さ対策と子育てを考慮してテラスからケージを保育室内に入れる。子育てに必要なスペースを段ボール箱を使用して作る。ウサギの成長と変化と共に飼育環境を変えていく。子どもは、久しぶりにシロを遊びにつれだして園庭に行く。その先でシロの異変をうんちと察するまでに、子どもはシロと体を通したコミュニケーションをとるまでになっている。糞尿の始末やトイレトレーニング等の飼育の仕事は苦も無く主体的にする姿に保育者は心打たれていく。そこには、光村の飼育への関わる姿を子どもの姿を通して観ることができる。

9. つながる命との出会い

3月18日の修了式を前に、シロとクロや6羽の赤ちゃんウサギの世話をどうするのか話し合った。ミカ、モモやココたちは「小学校に連れて行きたい」といいだした。私たちは、自分たちで守っていける力を付けたこの子どもたちに託したいと願った。そこで、進学先の小学校との交渉を私たちがするのではなく、自分たちで進学先の先生に交渉するようにとの思いをもった。ミカたちに、「小学校に行って、先生が決まったら、その先生にみんなからウサギが飼いたいことをたのんでみたらどうかなあ」と提案した。それまでは、幼稚園で育てていくこと、赤ちゃんウサギは6羽共には育てられないと話し、1羽は幼稚園に残し5羽のもらい先を探すことにした。まず最初にゴンの家庭へ、次にモモの家庭へ、次にタツオの家庭へ、次にコウスケの家庭へ、そして最後の1羽は3歳児の家庭に引き取られていった。幼稚園に残ったウサギの名前は、クロとシロの子どもなので“ハイ”と名付けた。

修了式を前に一週間をかけて次に進級する4歳児に世話の仕方を伝えていった。そうして、2008年度からは、新5歳児がシロとクロの世話をするようになった。子どものハイは、今まで一緒に子どもと世話をしてきたチカコ先生が受け持つ3歳児で飼育が引き継がれた。一方、1年生になった子どもからウサギの飼育を引き継ぐ話は出てこなかった。

第2部 考察

耐震工事と重なり幼稚園とは違う環境の中で、空き教室一室を「ウサギ部屋」としての環境からスタートする。ウサギにとっては、自由に動けるスペースでありウサギが主である。この飼育環境が子どもとウサギの関係を紡いでいく大きな要素となったことが分かる。子どもは、ウサギ部屋での遊びの中にウサギが入ってくることから、子どもの遊びがウサギを遊ばせるアスレチックごっこへと発展してくる。ウサギを遊ばせたい思いが勝り、力に任せて無理やりしようとするものの、ウサギはその意に反して逃げる。逃げられると逃がさない工夫を遊びの中で考えていく。一方で、保育者と一緒に糞尿の始末や掃き掃除や餌やりといった飼育を子どもたちの手でやり始めていく。餌やりは、食べさせようと口の前に持って行ったり追いかけたりと、子どもにとってはほとんど遊びである。6か月が経

過した頃、耐震工事も済んで保育室に戻る。ウサギのシロとクロも成長し大人になる。飼育環境は、保育室前のテラスのケージ利用となり、ウサギの動き回る自由は人の手を借りないでできなくなる。保育者から、雌雄と判明したクロとシロの飼い方で、今まで通りの飼育環境ならば、クロに去勢手術を受ける相談を子どもに持ちかけたが、反対される。クロとシロを愛するがゆえに、ウサギの習性を見守り、どうすればよいか考え細心の注意を払おうとする子ども自身の主体的なかかわりの展開になっていく。子ウサギ誕生という感動的な出会いに恵まれ、子どもは飼育と遊びの間で揺らぎつつ生き物と共生する感覚を体を通して味わっていることが分かる。

IV. 全体考察

幼児教育は環境を通して行われる。その環境は人的環境と物的環境に分けられるが、子どもがウサギと出会う環境は、人的でもない物的でもない両者を融合した「命ある環境」ではなかろうか。子どもは、「生き物とともに生きながら、生と成長にかかわる喜びや感動とともに(中略)さまざまな失敗や悔恨の経験を積み重ねながら “生き物が生きる自然” への深い洞察と共感が熟成されて(川崎, 2013)」自分の中に埋め込んでいく。それは、保育者も同じであり、子どもと共に心を揺らし続ける存在であるということが、「生き物と共にある生活」を活かす上で大きな人的環境となり得ると考える。人的環境としての保育者がウサギに触れる姿を子どもがモデルにしている。保育者が、物言わぬウサギの行動の意味を推測して代弁したり、通訳をしたりするなかで、子どもは自分の経験と重ねその意をくみ取ったり推測したりしてウサギに関わっていく。その行為は遊びでもある。いつもそばにいる、自分の遊びの中でウサギと仲間になっていくと同時に、命をつなぐために日々行う排泄の始末や餌やりなど、「病気にならないように」「大きく育ててほしい」「食べた」「○ちゃんの 食べた」など自分たちが日ごろ周囲の大人から受けている思いをウサギに対して持っていく。子どもは飼育と遊びとの間を揺らぎつつ、ウサギの生態について直接の触れ合いを通して理解していく。「対象的認識は共感的な心情に裏打ちされて高められ、共感的な心情は対象的認識が進むことによって深化(川崎)」することがわかる。

2007年度と2013年度では、ウサギの飼育の保育に大きな違いがある。2007年度は、飼育を開始するウサギとの出会いと飼育環境づくりからのスタートである。子どもも保育者もともに初めて出会う出来事の中で生まれた実践である。2013年度は、継続飼育をしてきたウサギと、飼育を重ねてきた保育者との飼育環境である。ウサギの妊娠を計画的にしようとしたことがウメの病気を誘発したのではないか、子どもの楽しみが暗転した結果になったことを深く反省し、そこで光村は「教材としてのウサギ」であったのかと自分に問うたのである。しかし、時を置いて改めて実践を筆者らで振り返り問い直す中で、人的環境としての保育者が子どもや生き物と共に心を揺らし続ける存在であることは、飼育動物が単なる「教材」としての意味をはるかに超え、子どもたちにとって人的でもない物的でもない「命ある環境」として位置づくことが分かった。

引用・参考文献

- 岩田純一 2013「子どもの友だちづくりの世界」金子書房
- 河崎道夫 2013「“飼育活動”と遊び」現代と保育 88 号, 144-159
- 中川美穂子 2007「〈相手の感情と身体〉を理解する脳をつくる」文部科学時報, 51-55
- 中川美穂子 2007「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4. 53-65
- 鍋島恵美, 高野史朗, 光村智香子 2010「ウサギとともに暮らす日々できごとから学ぶ -ウサギの飼育の保育を通して-」京都教育大学環境教育研究年報第 18 号, 1-24
- 鍋島恵美, 光村智香子, 高野史朗 2011「ウサギとともに暮らす日々できごとから学ぶ その 2-ウサギ物語の語りから-」京都教育大学環境教育研究年報第 19 号, 13-26
- 光村智香子 2010「継続飼育-教師と子どもと保護者とともに-」全国学校飼育動物研究会、Vol. 13, 69-80
- 光村智香子, 鍋島恵美 2012「ウサギとともに暮らす日々できごとから学ぶ その 3 -ホームステイの語りから-」京都教育大学環境教育研究年報第 20 号, 51-63
- 鍋島恵美, 光村智香子, 高野史朗 2013「ウサギのハイとの別れ(死)が子どもに残したもの -幼児期に継続飼育を体験した小学生の語りを通して-」京都教育大学環境教育研究年報第 21 号, 57-73
- 光村智香子, 高野史朗 2014「生き物と共に育つ保育のあり方」全国学校飼育動物研究会 (口頭発表より)
- 幼稚園教育要領 2009 文部科学省

追記 本論文は、筆者らの先行研究で収録したエピソードを抜粋して分析している。